

## 資料 山之口獏：「むらさき」への投稿作品

松下, 博文  
九州大学大学院博士課程

<https://doi.org/10.15017/15477>

---

出版情報：文献探究. 24, pp.21-29, 1989-09-20. 文献探究の会  
バージョン：  
権利関係：

## 資料 山之口 貌

松下博文

—「むらさき」への投稿作品—

はじめに

I 「むらさき」について

- 昭11年8月号 — 「晴天」 (詩)  
昭11年11月号 — 「再会」 (詩)  
昭12年2月号 — 「生きてゐる位置」 (詩)  
昭12年3月号 — 「夜」 (詩)  
昭12年4月号 — 「つまり詩は滅びる」 (隨筆)  
昭12年6月号 — 「猫」 (詩)  
昭12年10月号 — 「秋の常盤樹」 (詩)  
昭13年1月号 — 「加藤清正」 (詩)  
昭13年2月号 — 「僕の詩」 (詩)  
昭14年1月号 — 「楽になつたといふ話」 (隨筆)  
昭14年3月号 — 「上り列車」 (詩)  
昭15年6月号 — 「写真や鏡」 (小文)

貌は「むらさき」に十二篇の作品を発表していた。<sup>(2)</sup>右はその全容である。このうち「秋の常盤樹」「写真や鏡」は今回新しく蒐集し得た資料。また「血沫をあげ／あはたゞしくも虎年が来た」という詩句の内容から考えて、従来、昭和十三年虎年の作であろうと見做されてきた「加藤清正」は実際には雑誌裏付けの印刷納本期日から判断する限り前年の十二月十日以前の詩作である可能性が強くなつた。この作品は「虎九題」と総題された新年特輯号の中の一題。おそらく十日以前に編集部要求に応じ十三年一月号に間に合うよう創作したものであろう。以下、今回の調査によって明らかになつた事項について説明しておきたい。

かつて、「むらさき」という雑誌があった。国文学の雑誌で、時々、ぼくの詩を載せてくれたが、編集長の小笹功氏のあつせん、昭和十三年の暮に、詩集「思弁の苑」を出した。発行所は、むらさき出版部で、神田の巖松堂書店のなかにあつた。詩集の巻頭に佐藤春夫、金子光晴両氏の序詩、序文を飾つた。なにしろ、郷里の沖繩を出て十六年目ぐらいのことではあり、結婚したばかりのことではあり、生まれてはじめて手にしてみた印税という金であつたりしたせいでもあつたらうが、なによりもまず、最初の詩集であつたことが、ぼくをして声はりあげさせて泣かせたのであつた。

昭和二十九年十二月二十九日号「東京新聞」紙上の文章。出版の歎びを、声をはりあげて泣く、という形容で表現したこのエッセイはたとえそれが刊行後十六年以上経過した時点での回想録であるにせよ、いや、むしろ、そうであるからこそ、当時の貌の胸中がいかなるものであつたか、その歎喜の強度を鮮やかに示している。刊行までの長い道のりを思えばおそろしくここに嘘はない。実をいえば貌はさながら我が子をかかえるかのように絶えず詩稿をいだいて街路を彷徨っていたし佐藤の序詩は出版五年前に金子の序文は三年前にすでに彼の懐中にあつた。思うに戦時体制下の忌々しい状況と劣悪な環境およびそれに伴う実生活の不如意が出版のための諸条件を遮っていたのであろう。不遇であつた。が、引用のとおり漸く好機は巡ってくる。

むらさき出版部は神田の神保町にあった。今、手許にあるコピーを参照するなら昭和九年五月創刊時の所在地は東京市神田区神保町二ノ二蔵松堂書店幽学社内、編輯兼発行者は波多野重太郎、である。

ただし、当初は紫式部学会出版部という名称であり、のち、昭和十年十一月号からかかる名称に変更された。学術的な堅苦しい響きをもった呼称から優美で女性的でやわらかい響きと字面とをもったそれに改称されたといえるであろう。創刊号巻頭は雑誌の性格をきわめて明確に語った藤村作「婦人の教養としての国文学」。ほか、石井庄司「額田王の芸術」・塩田良平「現代文学と女性」・久松潜一「万葉集鑑賞講座」・池田龜鑑「枕草子鑑賞講座」などの文章も同号を飾る。以後、十一年間、国文学の雑誌としてその命脈を保持することになるのだが戦局がいよいよ激化してくる昭和十九年六月たぶん誌紙の統廃規制の煽りも受けて通巻十一巻全百二十三冊をもって終刊に至る。大江スミ「教へ子のかどでに」・松平俊子「女子挺身隊におくる」・小野忠孝「鉄にいどむ」・宮沢若男「われらいかに生くべき」などの〈讀女性進軍〉と銘した終刊号の特輯タイトルを見たものには最早国文学どころではなくなってきた時代状況は明瞭であろう。

寄稿した作家・詩人・歌人・俳人を私意に任せ列記しよう。円地文子「玉鬘」「天の幸・地の幸」・岡本かの子「明暗」「高原の太陽」・与謝野晶子「初秋」「或る日」・林美美子「歴史」「七つの燈」・森三千代「更級抄」・堀辰雄「幼年時代」・伊藤整「文芸思潮の現在と将来」・中島健蔵「外からの感想」・保田与重郎「古典を読むについて」・芭蕉と蕪村」・室生犀屋「女の一生」・萩原朔太郎「万葉集と新古今集」・北原白秋「立秋」「早春賦」・三好達治「草千里浜」・中原中也「蜻蛉に寄す」・立原道造「草に寝て」「眠りの誘ひ」・津村信夫「父と娘」「冬の夜道」・阪本越郎「雲を望む人」・「麦秋」・竹中部「寶石」・草野心平「蛇二喰ハレタ蛙ノ子」「月夜の蛙」・神保光太郎「幼年絵帖」・丸山薫「新月譚」

「初夏抒情」・田中冬二「秋の夜とさびしい川蝦」・吉田一穂「叢林」・金子光晴「女たちへのいたみうた」「蝙蝠」・伊東静雄「古鳥哀歌」・宿木」・小野十三郎「北陸」「風景」・高橋新吉「冬枯れ」「秋風帖」・北川冬彦「牝猫の旅」「スケートの歌」・北園克衛「白い街」・菱山修三「硝子戸のなか」・蔵原伸二郎「南京特急天馬」・田中克己「秋薔薇」・稻垣足穂「新月抄」・土岐善磨「讀頌」・窪田空穂「雲」・生方たつゑ「大和暮雲」・釈超空「雄勝の山」・山口誓子「人と百合と蛇」・水原秋桜子「沼辺の春」。

とりわけ詩人を摘記した。(この中には「四季」「歷程」同人が多い)。それにしても昭和の文苑をリードしてきた華やかな文人の群像である。事実「むらさき」が果たした役割は婦女の文学的教養を高めるといふレベルにとどまるものでは決してなかった。誌の役割を積極的に意義付けるならば創刊時の目的を遥かに越えておのずから昭和十年代の日本の詩歌ひいては文壇に華麗な一ページを残していた、といえるであろう。獺の第一詩集「思弁の苑」はまさにこの季節の中に誕生する。

## II 「思弁の苑」とその時代

昭和十二年七月七日深夜、北京郊外で日中間の軍事衝突があった。歴史的に「盧溝橋事件」と呼ばれるこの事件はその後のわが国の運命を決定的にする。以後八年間、昭和二十年八月十五日の敗戦に至るまで日本国民は初めて國家総力戦の非常時態に直面する。周知のように、この時代は物資はむろんのこと精神までも権力によって完全に規制され、しかも結果的に本土空襲・沖縄での地上戦・広島・長崎への原爆投下などいまだかつてない多くの尊い生命が犠牲になった。現在刊行されている夥しい量の戦争体験記を見てもこの時代がいかに多くの犠牲を國民に強いていたか、そしていまだなおその犠牲から完全に解放されていない人々がいかに多いか、戦後の高度

成長期の平和な時代に生まれたわれわれにさえも強い衝撃を与え続けている。昭和十三年八月に刊行された『思弁の苑』にはかかるフアシズム体制にのめり込んで行く日本の姿を痛烈に風刺した一篇がある。

#### 加藤清正

血沫をあげ

あはたゞしくも虎年がきた

虎だ と云へば

上野の動物園や虎の皮や 虎そのものを思ひ出すといふことよりも思ひ出すのは加藤清正まづその人なのである

かれはそのむかし

虎狩りですつかりをとこをあげ

以来

歴史の一隅を借り受けて

そこにおのれの名をかゝげ

虎のあるところどこにでも出掛けては 史上の生活を営むてゐた

かれはまるで動物園の虎の係りであるかのやうに

いつも人待ち顔で檻の傍に立ち

虎に生彩を投げあたへたりして 少年達に愛されてゐた

ところでこれは今年のことである。

その日 動物園には僕もゐた

僕は少年達の頭の間から そこいらにころころ転がつてゐる肉体の

文明どもに見とれてゐた

やがて少年達がそこをひきあげると

例の加藤清正彼がである

かれは僕の肩をたゞき その掌をおのれの脳天に置き おもむろに唇をうごかした

弱った。と彼が言つた

ことしは虎で困つたことになつた。と言つた

これは意外にも かれのマンネリズムから飛び出してゐるほどの

更に一段と歴史的にほひの高い言葉であつた

それにしても

だがそれにしても僕はおもふ

史上の彼方からはるばると おのれを慕ひ虎を慕ひ 動物園にまで

やつてくるこの古ぼけた人物の上にすら つひに時勢の姿は反映するものか

虎に出て来られて

加藤清正が困つては

それは虎狩りの少年達が困る。と僕は言つた するとかれはあたり

を見廻して

かなしげな声を立て

むかしを呼ぶやうに かれは見知らぬ虎どもの名を呼んだ

すたありん

むつそりいに

ひつとらあ

そのとき

檻のなかでは

めをほそめ耳の穴だけ開けてゐた。

既述したように当作品は「虎九題」と総題された昭和十三年新年特輯号の中の一編である。ほかに佐藤惣之助「虎を夢む」・福田正夫「寅年の祈願」・竹村俊郎「思想の虎」・百田宗治「娘子関」・並木秋人「北支地図に対して」・丸山薫「少年の頃」・吉田一穂「

叢林」・伊東静雄「虎に騎る」の八篇が掲載されているのだが状況への鋭い批判精神を持ち得ているかどうかという視座を設定するならおそらくこの作品が最もその精神を備えているであろう。あまりに見事な時代のカリカチュアである。

獏は決して目の前の見える虎を見てはいない。彼が見据えているのは檻の外の見えない虎だ。聞き耳を立てて冷厳な目付きで人々を監視している巨大な虎——スターリン・ムソソリーニ・ヒットラーたちである。本当なら清正はこの巨大な虎たちを即刻退治すべきであった。そうしてこそ彼はマンネリズムの歴史の中から抜け出せ時代の英雄となれるであろう。へをとこをあげることができであろう。少年達から快哉を叫ばれ尊敬されるであろう。だが、しかし、この虎はあまりに巨大すぎ彼の手では退治できそうもない。今や彼に講じる手段はなかった。〈掌をおのれの脳天に置〉いて〈弱つた〉と繰り返す以外手段は講じられぬ。あの勇ましい〈史上〉の清正はいったいどこに消えたのか。英雄「加藤清正」はここで初めて戯画と化し、偶像と化す。だが、かかる哀れな英雄に獏は心から同情を寄せた。本当の偶像は清正ならぬ檻の向こう側でへめをほそめ耳の穴だけ開けてゐる巨大な虎、いわば「体制の虎」であることを十分承知していたからである。まさに獏の真面目、虎年の到来を忌まわしい時代のそれに見事に置き換えた鮮やかな体制風刺といつてよい。時代への鋭い批判精神を見るゆえんである。

ところで、昭和十年前後は近代文学史上文芸復興の時代といわれる。それは現象的に新雑誌の相次ぐ創刊という形で現われた。たとえば、昭和八年には「文学」「文化集団」「文学界」「行動」「文芸」、同九年には「詩精神」「文学評論」「現実」「文芸街」「四季」などの文学雑誌が続々と刊行されることになる。この現象は昭和九年二月のプロレタリア作家同盟(ナルプ)の政治的弾圧による潰滅と同盟内部の自解作用による解散といういわゆる「転向」の問題とも微妙に関連しているのだが、としても、同時期に事象として

出現した大家の復活・新人の活躍・私小説の再生・プロレタリア作家の再起・モダニズム文学の結果・不安の文学や行動主義の流行など昭和文学に豊かな実りをもたらすことになった。九年五月に創刊された「むらさき」もかかる事象の一例といえるし、もちろん「思弁の苑」も復興期に誕生した昭和詩の一つの結実といえる。昭和詩といえば「四季」「歷程」を語る必要がある。

十年前後の不安定な時代状況にあつてプロレタリア詩やモダニズム詩凋落の後を受け知的で繊細な叙情詩の復権を提唱する機運が生じてくる。その中心的存在となつたのが昭和八年五月創刊の「四季」である。この詩誌は保田与重郎に代表される国粹主義の文学集団「日本浪漫派」「コギト」の同人たちを交えつつ萩原朔太郎の影響下に堀辰雄・三好達治・丸山薫らの編輯のもと、便宜的にいえば第一期二冊(昭八・五同八・七)、第二期八十一冊(昭九・十同十・九・六)、第三期五冊(昭二十一・八同二十二・十二)という長い期間にわたつて刊行された。第一期には井伏鱒二・河上徹太郎・小林秀雄・佐藤春夫・神西清・竹中郁・中原中也・堀口大学・丸山薫・三好達治・室生犀屋・横光利一、第二期には井伏鱒二・堀辰雄・竹中郁・田中克巳・立原道造・津村信夫・辻野久憲・中原中也・萩原朔太郎・桑原武夫・三好達治・丸山薫・神西清・芳賀檀・神保光太郎・阪本越郎・杉山平一・大山定一・田中冬二・伊東静雄・蔵原伸二郎・山岸外史・大木実・保田与重郎らが執筆しているがフランス・ドイツなどのヨーロッパ詩の正確な理解に立脚して日本の正當的叙情を遵守しようとしたその態度は若々しくみずみずしい同人たちの感性と相俟つてこの期の特壇を気品あるものにした。立原『萱草に寄す』『暁と夕の詩』・津村『愛する神の歌』『父のゐる庭』・三好『閑花集』『山果集』『舛千里』・丸山『帆・ランブ・鷗』『鶴の葬式』・伊東『わがひとに与ふる哀歌』・中原『在りし日の歌』が個々に独自の抒情を開花させて昭和の愛唱詩集となつていのは知られるとおりである。『萱草に寄す』巻頭詩をあげよう。

はじめてのものに

ささやかな地異は そのかたみに  
灰を降らした この村に ひとしきり  
灰はかなしい追憶のやうに 音立てて  
樹木の梢に 家々の屋根に 降りしきつた

その夜 月は明るかつたが 私はひとと  
窓に凭れて語りあつた (この窓からは山の姿が見えた)  
部屋の隅々に 峡谷のやうに 光と  
よくひびく笑ひ聲が溢れてゐた

——人の心を知ることとは……人の心とは……  
私は そのひとが蛾を追ふ手つきを あれは蛾を  
扱へようとするのだろうか 何かいぶかしかつた

いかな日にもねに灰の煙の立ち初めたか  
火の山の物語と……また幾夜さかは 果して夢に  
その夜習つたエリーザベットの物語を織つた

「歷程」はどうであつたか。遠地輝武は次のようにいう。(5)  
「メ  
ン  
バーをみて何よりも興味ぶかく留意されるのは、そこから明らかに  
プロレタリア詩人と、モダニズム一派のアヴァンギャルドの詩人た  
ちを除外しながら、たまたまプロレタリア詩運動から離脱した二三  
の詩人をふくめて、いわゆる無政府主義詩人、その同調者、ダダ、  
ニヒリスト、人生派詩人、古典主義者、唯美的浪漫詩人等が雑居し、  
一つの「溜り場」を形成している点である。このことは、もともと  
このグループに特定の性格がないことを物語っているわけだが、同

時に、それは草野心平によつて象徴されるこのグループの思想上の  
渾沌状態をも反映するものでもあつた」。

「歷程」の創刊は昭和十年五月。編輯は創刊号を逸見猶吉、二号  
を草野心平、六号から十六号までを三ツ村繁蔵、十七号から二十三  
号までを土方定一、二十四号以下は伊藤信吉と平田内蔵吉が担当し  
十九年三月までに二十六号を刊行した。主なメンバーを列記しよう。  
高村光太郎・草野心平・伊藤信吉・土方定一・逸見猶吉・尾形龜之  
助・藤原定・大江満男・中原中也・菊岡久利・黄瀛・山之口猷・松  
永延造・金子光晴・高橋新吉・小野十三郎・吉田一穂・馬淵美童子  
・山本和夫・菱山修三・岡崎清一郎。遠地が指摘するようにこの詩  
誌には誌としての特別な主義主張はなく《思想上の渾沌状態》を呈  
していた。それは昭和二十三年七月の戦後復刊第一号に掲載された  
草野の編輯マニフェストの一節である《われわれはわが國の詩を、  
常に世界的立場において思考し、旗も党も雑誌としては持たず、詩  
自体のなかに没入します》という文章からも容易に理解できること  
であろう。ただ、表面上《特定の性格がない》とはいっても「四季」  
の知的で繊細な叙情と比較して庶民的な日常感覚や広大な宇宙感覚  
に立脚して作詩している点にこのグループの大きな特徴があるよう  
に思われる。獺の作品の強烈な個性もやはりここにその淵源がある  
といつてよい。草野『蛙』『富士山』・大江『日本海流』・逸見『  
逸見猶吉詩集』・岡崎『火宅』『肉体輝耀』・吉田『稗子伝』『未  
来者』・高橋『戲言集』『霧島』などがグループを代表する詩集で  
あつた。『富士山』から「作品第貳」をあげる。

#### 作品第貳

題目。

雪の灰色の。

灰一色の罪罪罪罪罪はいつしか大きなうねりになり。

南も北も目あてなどない唸りになり。  
樹海の雪は煙吹き。

新しい灰色の群にいりまじる。

吹きよせ吹きちぎれ大雪壁に槍當り。

もんどりうつて沈むものや。

狂ひよちのぼる灰神楽。

ガランの天の大きな虚無と。

きびしく光る山嶺との。

ねたましい程の愛の深みに神神の。

おくる饗宴がこれなのだろうか。

どこからうねりつづくか億億の。

吹雪のうねりと山嶺と。

針金つんざく修羅の叫び。

ああその底に。

天のおくがに通じるのか f u j i i b a s a i t はしずかに眠る。

叙述してきたように『思弁の苑』は時代的には盧溝橋事件に端を発した日中戦争の不穏な社会状況の中に、文学的にはかかる状況を背景とした文芸復興の豊かな実りの中に上梓された。「加藤清正」はさながら時代の写し鏡であったし「はじめてのものに」「作品第一」は少なくとも復興期の詩壇を代表し得るものであった。ただ、後者についていえばやはり彼は草野の世界に抵触する広大な宇宙感覚や「歷程」同人に見られる庶民的な日常感覚の中で己の詩的世界を展開していたのであって「四季」派の同人たちとは全く違った位置に立っていたといえるであろう。引用した立原の一篇と獺のそれ

との明らかな質的差異はそれを如実に語ってはいまいか。戦争・弾圧・転向・文芸復興——『思弁の苑』はかような時代の中で独自の世界を見せていた。

### Ⅲ 「むらさき」への投稿作品

『思弁の苑』には大正十二年から昭和十三年までの詩篇五十九篇が収められている（『定本 山之口獺詩集』「あとがき」）。その作品配列は己の詩的生涯を遡及するような形で、つまり、巻尾から巻頭へと制作年代順に序列された。確かにここには仲程昌徳氏が指摘されたように「ものもらひ」にはじまり「ぼろ」で終わるといふ放浪形態の意図的な図式<sup>6)</sup>が存在していると見てよい。〈家々の／家々の戸口をのぞいて歩きたびごと／ものもらひよ／街には沢山の恩人が増えました。／恩人ばかりを振ら提げて／交通妨害になりました。／狭い街には住めなくなりました。／ある日／港の空の／出帆旗をながめ／ためいきついてももらひが言ひました／俺は／怠惰者 と言ひました！詩集巻尾「ものもらひの話」〉〈野良犬・野良猫・古下駄どもの／入れかわり立ちかわる／夜の底／まひるの空から舞ひ降りて／檻樓は寝てゐる／夜の底／見れば見るほどひろがるやうひらたくなつて地球を抱いてゐる／檻樓は寝てゐる／軒が光る／うるさい光／眩しい軒／やがてそこいらちゆうに眼がひらく／小石・紙屑・吸殻たち・神や仏の紳士も起きあがる／檻樓は寝てゐる夜の底／空にはいつぱい浮世の花／大きな米粒ばかりの白い花——詩集巻頭「檻樓は寝てゐる」〉。

獺の最初の上京は大正十一年秋のことであった。その後関東大震災に遭遇し罹災の民として一時帰郷するのだが大正十三年夏から十四年の間（時期は明確でない）に再度の上京を企て、上京する。このときの作品が「ものもらひの話」である。以後、昭和十二年十二月に安田静江と結婚するまで獺は一定の住所を持たなかった。処女

詩集の冒頭を〈野良犬〉〈野良猫〉で書き出したのもかかろ生涯を  
自己規定しようとする意図があったからにちがいない。「むらさき」  
に発表された「晴天」から「秋の常盤樹」までの詩作はこの放浪期  
に創作されたものであり新出の「秋の常盤樹」を除いてすべて『思  
弁の苑』に収録されているがそれぞれに当時の猿の思念がストレー  
トに綴られていて興味深い（以下の作品では「加藤清正」「僕の詩」  
が『思弁の苑』に、『思弁の苑』刊行後創作された「上り列車」は  
第二詩集『山之口猿詩集』に収録されている）。個々の作品につい  
ては一読していただくとしてここでは新出資料についてのみ説明し  
ておこう。

初述したように今回新しく蒐集した資料は「秋の常盤樹」「写真  
や鏡」の二作である。それぞれに内容的な面で特別に説明しておく  
ものはない。ただ、前者は文体上の類似点からいえば「ものもらひ  
の話」を想起させる。しかし、作中の〈常盤樹〉〈紅葉〉なる語彙  
に象徴される季節感覚やその風土性および詩的テーマから考えてこ  
の世界は南国沖縄のそれにはほど遠く、創作時期に明らかかなズレが  
感じられ、作品成立上、時期的に見て両者間に共時的磁場が存在し  
たとは判断し難い。従って、文体成立上も二者に密接な関係はない  
と言わねばならない。ただ、詩人の内的リズム、いわば、詩人の内  
在律あるいは生理の表出、という視点から見れば、文体のこのような  
一致はきわめて重要な問題を孕んでいるだけに全詩業を視野に入れ  
た巨視的立場からの考察を必要としよう。今後の課題としたい。

後者は三好達治・草野心平・春山行夫・丸山薫・蔵原伸二郎・小  
熊秀雄・金子光晴らとともに〈現代詩壇継承の人々〉の一人として  
出版社の求めに応じたらしい三十年代半ばの若々しいネクタイ姿の写  
真一葉に付された小文である。小文とはいうものの事象を相対的に  
把握しようとする猿独自の詩的精神構造の内面が確実に読み取れる  
文章であり、それは、たとえば、次のような作品世界に直結する。

### 「鏡」

鏡のなかの彼にうちむかひ  
残飯でもあるなら一口僕に、と言ひたがつてゐる僕なんです  
髭を剃たまへ、と彼は言ふのです

清潔は清潔なんです  
じれつたい清潔です

僕は、と僕は言ひかけて 僕も髭を剃らう、と言ふてしまふた  
僕なんです

言ひたいことが言ひたくて

僕は柄杓でバケツの水を飲んでしまふたのです

《鏡の中に写るのは一種の演劇、芝居とでもいうべきものだ。ど  
んなに深刻な内容を持っているものでも、鏡に写して見れば、サイ  
レントの世界であり、実にコミカルな、人間が動物の原理に戻った  
状態で観察される虚実の境界も判然とせぬ複合感情を主役とした、  
いわば最高の人間劇となるのである。鏡には自分も写っているし、  
自分が書いている詩も写っているわけで、それを二重に書くことに  
よって、詩自体が山之口猿を鏡の中から逆にとらえていく。鏡の中  
の世界と現実の山之口猿の世界とが交錯する危うい線上こそ山之口  
猿の詩の原産地といふべきか。彼は実像もまた非常に大切にしてい  
るために、まず正確なスケッチから入る。そして生な実の部分を持  
かに削って行きながら、詩の実を封じこめようとする。その客観視  
の世界こそ恐ろしい、と僕は見るのだ》。「鏡の原理」と題する山  
本太郎の評。猿の詩的精神の重構造を鋭く且つ鮮やかに指摘したも  
のといつてよい。そしてまた、動きこそ完全に封じ込められている  
がことは写真の場合でも同様であろう。思うに写真ほど自己を相對  
化し客観化せんとする視点を明確に提供してくれるものもあるまい。  
写真や鏡の「虚像」と、生身の「実像」とが複雑に錯綜する時間と

空間——かような世界の造形もまた山之口獺の創造世界の一特徴である。

ところで、今回の調査の収穫は作品の初出年月が明らかにできたことである。現存する作品の多くに制作年月時が付されていない状態の中で数篇ではあるが初出年月が判明したことは獺の詩的創造の軌跡を辿るものには作家・作品研究に一つの方向性を与えてくれるといえよう。今後かかる基礎的資料の蒐集はますますその重要性を帯びてくるにちがいない。最後になったが獺と親友であった伊波南哲の「琉球風土記」が昭和十七年十二月から同十九年三月まで本雑誌に連載されていることを記しておきたい。この連載は十九年十一月に泰光堂から一冊にまとめられて刊行されている。<sup>(7)</sup>

### 註

- (1) 雑誌「目次」では「私の詩」となっているが実際は「僕の詩」として掲載された。また、定稿の「僕の詩をみて／女が言った」と「へさうして女に／僕は言った」は初出ではそれぞれ「僕の詩みて／かの女は言った」「へさうして かの女に／僕は言った」となっている。

- (2) 「むらさき」に作品を発表していた事実については本稿に引用した「声をあげて泣くー私の処女出版」のほか「装幀の悩み」にも書かれている。引用しよう。「へさうの最初の詩集『思弁の苑』を出版したのは、昭和十三年の八月である。当時は、神保町の巖松堂のなかに、むらさき出版部というのがある、「むらさき」という雑誌を出していた。ばくも頼まれるまま、時々その雑誌に詩を発表していたところ、編集長の小笹氏のすすめで、むらさき出版部から出すことになったのである。ばくは、機会さえあればいつでも出版出来るようにと、詩稿の整理をし

てあったので、それに、佐藤春夫の序詩と、金子光晴の文を添えて、早速、小笹氏に渡したのである。佐藤春夫の序詩はその五年程前にもらってあったし、金子光晴氏のは三年前にもらってあったものであるから、かねて詩集を出したかったにちがいないが機会をつくるのが困難だったわけなのである。

- (2)を参照。

- (3) 終刊号の「編輯後記」には次のように書かれている。「顧みますと昭和九年五月に創刊大一号を世に送つて以来、本誌はこゝに満十年の歴史を重ねて来ました。その間読者の方々の熱心な御支持を得て、独自の性格を築いて来ましたが、本号を終刊として発展的に解消し、新たに六種の短歌の雑誌を統合して、「藝苑」として新発足することになりました」。

- (4) 遠地輝武『現代日本詩史』（昭33・2・昭森社）416頁。

- (5) 仲程昌徳『山之口獺ー詩とその軌跡』（昭50・9・法政大学出版社）74頁。

- (6) 山本太郎『鏡の原理』（『山之口獺全集』第一巻「解説」）。

- (7) 『琉球風土記』「序」中の文章をあげよう。「琉球風土記」は雑誌「むらさき」に、連載したものが大半で、執筆に當り、喜舎場永殉氏の「八重山民謡誌」伊波普猷氏の「古琉球」仲原善忠氏の「久米島史話」小野重朗氏の「琉球文学」柳田国男氏の「海南小記」河村只雄氏の「南方文化の探求」須藤利一氏編輯の「南島」等参考にしたことを感謝したい」。

（一九八九・九月稿）

次頁料

秋の常盤樹

私なんにも言はないうちに  
みんなが言ひました

冬は

さむい と言ひました

春は

あつたかい と言ひました

夏は

あつい と言ひました

秋は

すゞしい と言ひました

あゝ

私が

着のみ着のまゝであるうちに

もはや

みんな

紅葉です

写真や鏡

元来、僕は、鏡や写真で自分の顔や姿  
を見るのがすきである。とは云つても、  
鏡を相手に坐り込んでまつ毛や唇のあ  
たりに指などを動かしたり、あるひは、  
駅々の手洗所の鏡の前で暫時を過ごし  
たりするほどの御婦人的なたしなみか  
らではないやうだ。鏡に映る自分の顔、  
写真にあらはれてくる自分の顔を見て  
みると、むしろそれは他人の顔でも見  
てゐるやうなきが湧いてくる。